新令和詩集 抄

伊地知文庫
文庫20
310
8

伊地知氏書册

古今和歌集両度聞書巻六

雑躰

雑歌と云は雑歌・雑躰・雑の恋・雑の哀傷・雑の誹諧歌也

長哥 短哥 旋頭哥 混本哥

短哥

此事古来より雑歌と云事ながら万葉集より一首ありや
又は世の末見え久安より後拾遺院の代人々ゟ哥を
やうやうと短哥と一首ならべて書れど始
くれより後段々と沙汰よろしく勅選も此
集より始まるよし短哥と仰下されるや

文庫
310
8

脇指脇後頭なるものの
ありくを心うとて長帝と云祖帝
にほうなりわれたるを中よりいさめ
うつりくこの君ゝ多きをとて近をいふを
初のつきのいきりくもれなみ紀州へよ祖
帝と云ゝいとれわるとうや後感へかなるを
先よ同もる義なくれくさおとしてめ
や准してとれることし千載集よ祖帝のとかれ
ありと定家つへこの集の遺恨ことに沿る
ことて万葉よありと云義たとへ一帝ことの覚
ることを不可上帝乙紀りや万

葉集長帝とも紀帝たもり
そへ英之ありやまもとすへきりやうなみ義
乃へうもと組定家つのそへ帝ありへきう安乃
川もと雄帝をとれしと奥よ祖帝のこと
き義の式集よも忠岑帝よ君ら世よ叙
山の名清水の帝へ仕りと一帝ふるへ也と及すへ
きとそるへき義なもさもる紙よ
准もとへことそ長帝へ
ありもおくれ一首もそ
あとへへ紅の偽同事

ゆうかれをとこまつをきくと心をよせてするに於て尋く

題しらず

あふのまれなる女のよめる

えぞの方なれいるをやまと云ふ人多かれ（えんぶ）ども猶ふかうかなれいかをえぞと云ふ人男の方なれいかをえぞと叫ぶと云ふことに於てもこれかなれとなしひつくへそる抗ふれ注付ことあり巳前ふかうかなれいかをやまと云ふ上をいきすてとちかひくくそ

△ワカ身ハ常ニアマクモノハルヽトキナクフシノ根ノモヘツヽトハニオニモアフコトカタシナニカモ人ヂウラシワスラシオモヒテシ思ワ今イテ

（ざつ）ゆる哥なりく（ざつ）哥の長哥なりしこと（ツラユキ）也集小古人の哥をなるまじくくこと也集撰（せんじ）せんことをいふ也墓（はか）場とは墓所（はかどころ）也悪傷雑（あくしやうざつ）多くのひろくもりつゝ入なること大文字のこと久くさのこと也集撰（せんじ）する間の事こゝろ也ものゝりやうやうなんとは久く心をそへ記（しる）者（もの）今乃哥とあれむまことに於ても事やわんとこんとりやうやうなんとをいふこ

あれむこへありきてふ人九こそは嫌（いや）なれ分（わか）ぬをそなるこの歌をこそ（あまつ）天津（そら）やそまでやそあけ来の

世まそれ給とて
　　ゐまそ人丸うよのまことも
ともにおかせそれるいちろふけさやちろの男よ
ひりまろ事をとりるん
　　人丸の事を先わけて心ゑかこゝろ
　　代の作とそこさるゝ美し
　　ゐをおなへ〳〵そこをよ〳〵雲かほ〳〵ん心地して
ちの情(こゝろ)をおもはしまを
　　とは及そこさるなし
　　かゝるをそこいなるさ一事をとろあふ
　　ものゝりかこさ

を薬(くすり)のかゝくのほるこく人丸のろよひう
称くし道よそろとよろして後のちの心
をなそこさるあや一源の禅岡(ぜんこう)の花いよそこ
君の仏恵(ほとけ)のようまれとも山集(せんしゅう)の撰者
こかこそこさ一心の称をくれをちとこ後と
そ給れ給り
てるひろもち紀(のり)ろの男加(くわ)を推ろ秋のくる
かこそうあさむこさ歩くみろ紀りこのくりろ男
のみこさりなくしくもおもはこを
照(てる)ひろもち紀寺(まてら)こ注目をい矢ろたこ心(へ)い
君こをこさ寺のくこ千湯のまをなりし

事し忠岑(ただみね)番長(ばんちやう)の時の義と雖(いへ)ども秋のくれ
ごとにとり忠岑(ただみね)右馬府生(うまのふしやう)と成事しかさもさ
出(いで)くる歌(うた)を心なもちゐてなど云義し
番長(ばんちやう)とり右馬府生(うまのふしやう)と成(なり)ゆく事
なれど君(きみ)をさ雨(あめ)をもりてうく云
もの迎湯(むかへゆ)を守(もり)をいひか
せりもてゆくもれもかゝと云
なり新勅撰(しんちよくせん)雑歌(ざふか)
うなりと作事(つくること)侍(はべ)れい
年(とし)へる宮井(みやゐ)と詠(よめ)てわ
その外(ほか)うもそ

こゆをき寺の事し君(きみ)をき男(おとこ)にて宇(う)さ風
とゝきうの義し
へ海(うみ)は霞山(やま)もろくれ雲(くも)の霞(かすみ)たなひれ
もゝとせの河(かは)うり小君(きみ)とうまこゝ
ふやうふいとなせり
ひとりふる年(とし)とふるせれ雪(ゆき)
とハ年(とし)三十年(とせ)の事(こと)し
光(ひかり)のとどへやうれい　とゝ
くやきし
つえひくんむ　とゝ我年(わがとし)とりして君(きみ)を年(とし)
ふるハ川(かは)きのくし

タヽミ子

冬ノナカウタ　ミツ子

七條ノ后ウセタマヒケルノチニヨミケル

君か代にあふ坂山の石清水こかくれたりとおもひけるかな

此長哥ハ古哥の心と此一首よみてまゐらせたるを

千早振（ちはやふる）神無（かみな）月（つき）とや　此長哥義なし

おきつ浪あれのみまさる宮のうちハ　此長哥ハ

無事にあらはれたる故にかくいへる哥こそ

旋（せん）頭（とう）哥　文字の心ハしらぬめくりかへし心をよそへ

めくりかへすやうに見えしよりやうハ文字七字の句

より一句そふる也　付 旋頭哥ハ文字七字七字の句一句あまると

かしらへめくらしてみるへし初句にかへるとて

よくよくいはなしとよし

うちわたすをちかた人に物申すわれそのそこに白く　ヨミ人不知

さけるハなにの花そも　此花ハ梅花也梅といハんとて

まことをさくいなくおもしろくて白く見ゆれ

も哥妙なる所を何の花そとよめる也

也　付 旋頭へ五そく見ゆる也そのうちとも

そこのうちにと云義也

春されハ野辺にまつ咲見れとあかぬ花まひなしにたゝなのるへき

花の名なれや　此抄云花ハなにしとも花といひ

なにゝしてそかは梅ハといはつなれハなりと

いふた哥をとかけるやう君てんへもとハそうたう字ハ

まくらへし物によりくりやうふくやうにて花

もいひなしと花をいはなしとうけたり　付 旋頭 長さ

まて暫へてまつさく物の事こと也まとわれ
もゝてゝ杉ゝ枝ゝさとゝえんこ

そゝゝん

その世行方のへよてとゝもゝてゝある枝奉とゝてゝそひろえん
ゝてゝもゝてゝある枝　美カ　ツラユキ

君ゝ為みゝその山の紅葉の久祢ゝ月四条の西の
そめるなりゝり

飛鳥井雅経卿傍也　諧胡腊切　調偶五十八
和ゝ合ゝ

ひとゝうの事純流ゝ
人のわゝの事とのゝゝ
ゝそゝ当流ゝ不用ゝ当流のゝゝ此道教道此ゝ
道進ゝ道ゝ云ゝもゝり史記ゝ滑稽

此ゝ外ゝ

此ゝそれゝ外ゝりさゝ後漢之代ゝ始光武之
時東方朔ゝ云者ありるひさゝ人心ゝ正ゝ實ゝ
仙人ゝ世ゝ出ゝ政ゝ
ゝもゝ心ゝとゝろゝ云事ゝわり
久ゝ老ゝ長寿ゝ者旋丸寿ゝ中着ゝ物ゝ
ゝゝかさゝ此儒弄六十着ゝ及ゝり純流ゝ後
かゝゝゝゝそゝひゝゝん事ゝゝゝ
ゝゝゝゝなゝゝゝゝ
教ゝゝゝゝゝ一部ゝゝゝ物ゝ
ゝゝゝゝゝ義ゝ凡ゝ
第一ゝゝゝゝゝ

てありつるこそ
凡祈(いの)る地水火風(ちすいくわふう)も
長寿(ちやうじゆ)誑(たぶら)ス寿(じゆ)ふりくるも肝心(かんしん)なる不死(ふし)
うやむやとそ第十物名(ぶつみやう)いたるまでの
心世寿(せじゆ)いふ世(よ)界(かい)も道(みち)となく心(こころ)なれハ
不生(ふしやう)不滅(ふめつ)の理(ことわり)をそれ悟(さと)人不知
梅(うめ)桜(さくら)ちるをきらひ鶯(うぐひす)のこゑをもとむるのこゝろ
ものいふ心(こころ)もなきものゝ文(ふみ)まいてにそ叶(かな)
をわきまへ云(いふ)ものゝ心(こころ)なきに叶(かな)もわれ
ことなれりとて云(いふ)ハ世寿(せじゆ)の心(こころ)鶯(うぐひす)の今
とそれくことわりなるうへ

かれハ我(わが)死(し)をしらぬ
ものとおもひくらしつゝ鶯(うぐひす)のこゑを
うれしとおもひくらしつゝ死(し)をしらぬ鶯(うぐひす)なり
ありつゝ人(ひと)をそしりわらふ
人(ひと)の我(わが)ため世(よ)
こそなりけれ
とハ人(ひと)をそしりて人(ひと)を我(わが)
人(ひと)とおもはぬ
ひとりこゝろ
いまそこゝろ
とも人(ひと)とハ

家の死父母(ちちはは)やうやうとしてもろともに
も死(しに)別(わか)れてあるとをきゝて
又黄泉(よみぢ)の先帝(せんてい)の教(をしへ)を
うけわすれざる義(ぎ)なり世上(せじやう)おほきうく地(ち)
のやうに作(つく)るおほなりこゝに新田(しんでん)の境目(さかひめ)
こゝんをおもひつゝきの教(をしへ)
そる人の新(あら)しきやうのこゝろあるべき
わりをもとくべき別(わか)すべきの教(をしへ)
久(ひさ)しきをもとくべきをもとくべきをもとくそれ
よりそれ久(ひさ)しきをもとくべきをもとくそれ
こゝろの田(た)を作(つく)る事(こと)なり

發 敢行(かんかう)

ちくの国(くに)おさハ河(かは)の別(わか)郡(こほり)のくにのうは
きて此(この)田おさをとくべきをもとくべきをもとくべき
下心世上(せじやう)ちくの田(た)をつくるかなるみて云事(いふこと)のも
たとへ作(つく)るもなさゝ田おさをとくべきをもとくべき
かなをこゝろをこゝろをこゝろ人(ひと)のさるよ
なをこゝろのもそこゝろ事(こと)をなさゝをとくべき
なをこゝろいふ法(ほう)のこゝろもろくべき
悪名(あくみやう)もこゝろにこゝろをは法師(ほうし)
なりよへきをもとくべきをもとくべきをもとくべき
なる死(しに)ひをとくべきの教(をしへ)久世(ひさよ)をとこ

なつれぬ時をもへ一行益の二ともへきさ
秋てその山ゐるう田をつるはくれいはひるを
きこや

七月六日七夕ノコトヲヨミケル　藤一カ子スケノ

いさくとおもふく心をそ
見あはをなりん事と秋へそ
さなりてそ門
くや海ん
ともわるう
あると秋短
もとていそく
出来被る事
心をのとくゆる
亀の道
ちはやもも
まくと云
れ秋つ
ひとのまつ
いさくへ秋のな
ことなくさむへき
心歌のさうなる
てわくへまも

事成へき事
心をのとくゆる
亀の道
ちはやもも
まくと云
れ秋つ
ひとのまつ
いさくへ秋のな
ことなくさむへき
心歌のさうなる
てわくへまも

題一一

化河内能恒

樂と名ん[楽]ともる人民の愁もよ
くて国もまさりひろまりて万とも老
ぬ義とおりつゝさのいさめとみもおもひ
物ゝ義と秋のわきを日のくるゝ天地の和ら
ぎを理て徂[往]もてみ一とゝ
もこのうるこゝ号[呼]とゝいさむるこゝいかゝ
ぬとこゝろ悩[なや]ゝやまやと云歟 遍照
秋の暁にかまめさたてる女郎もわすれ角[つの]笛
んいは死のうつくしきうるの白玉をうさ
ぬくなりめさたてるとそれもまろなゝ

おゝう暁のうつゝは女郎も一時そと云歟ゝ秋
の暁ゝをるる約束[やくそく]下心一生六十年のう
ち三世常[じょう]の上ゝ万をとかさ
をゝくしてあのさゝう
唯秋の暁れおもまて
ゝうりと教[おし]さもろゝ秋の暁を原のうゝ
ゑゝ

秋これの暁へまたるゝ女郎ゝ注[さす]まの人々つまそう
ゝまゝ見ゝへきゝ仮[かり]ゝ悩[なや]ゝ人をゝむるとゝ云
まゝゝもゝ死掛[しにかけ]ゝまそゝゝうゝ下心実[まこと]ゝ
ゝ人の何ゝありひなゝ事なゝまゝ

清人一一

寛平御時后宮ノ哥合ノ哥

秋風ふかこころひとつ
我ひとつにも下ふく

在ー ムラヤナ

古今物語巻六

アスハルタヘント
スル日トナリノ
家ノニカヨリ
風ノ香ヲ吹コシ
ケルヲミシノ甚ハ
隣ノ家ハヨミラ
ワカワシテル

謝ーー

秋のひかりとくるしむる人を風もるゝこと
冬取しる是凡隣(とうり)のをくれハ中垣(なかがき)をもそ既なちるゝ　フカヤフ
縁わりハとト人術事もその一事もてゝるみて
し侍る事れよ紀をさもわりてるの人凡拙花
其れ秋也すと云是不礼(かまはい)の事と又道をとり
ま一事もこうるおの大事をさくゞ川紀
なるのいさめと

右(そのつこ)とふ乃ふ了慈の跡をひてたるよ秋ハいそねよする　讃人ーー
久しりたをひそめし慈の上ちあるまふ我よ
たる家時ハをきこたるをしやねと云しなる
いそうねめるハもとそうりとえせあくこと下斜の

かふまそめし愚(かど)のみ乃はらくて助りたるもあれハ
それとれさらぬ事もかるゝくわとうしなふ
んそされハとあしのひろ事ともこそ時悔(くやみ)しれる
しへきの教也

枕なを沮り慈の也あくれハせんるなきそ床中(とこ)よとる
枕(まくら)りとハ善(ぜん)よ夙沮とは慈(わる)よるる慈と歌枕(まくら)
のうへ入ると歌りる善悪(よく)わり善の歌ハせめくな
まてやもそれさへ事るれハ不[illegible]也まして
悪(わる)歌りしひろねくハ前後(ぜんご)左右(さう)とるゝて拙なり
其さ時の人ハかなしもと歌へわかるとるゝとる
わりとハさむる教也

ゑひきうかくしも方こそわりなけれ
ゑひきれう文字もしらねよにおりゐ
ねよろこ〻ろとゑきこゝろなゑひきと云事ハうた
云ばしもの心なゑひきもてりひわりもろかつ
きてこそわまこ〻ろもとくくてたて
まことれたる紀ちもとうこんかくいてたる紀ちもと
ときこゝやすくんの歌とハ貪歌よ
て方角も弁なをもこれわる事と風もとも
わりあるとも覚えそく童こゝろなきこゝろさ
我かく下心たく人世とものうれてわくへさてもそ
わくわとなりひて我心もたゝりと見せそ山

ぬくまてこゝろわりわりよさてもうたにて世中もむび
しく成なくして方とをもあるゝ歌ハてそこゝろ
といさゝもそんと
みなの山なるゑそうたひの文のかそのかせん
やう事もなくそひうたひうたひ事も我
なりひれかをあり志そこゝろ人も志ゝしと
云ふくこゝろ耳よやうにハ歌
ゑひきんわもたうてゝ人毎ゝ方とかろかよ
をなりへき散
是川の山風のそうつとのれゝ人我れ刀てみうまこゝろ
当のそうけと云事ハ玄賓僧都もりてゝ

まことに心の中のやうすみん物さへ我をなくて
いとゞうき世をいとふ心きはまりなきこと
先さきにたゝ如くこれ家の流事し心にかゝりて
みやこをもとゝのへん物とおもひしかども
大切にまかりのぼりしまゝたゞ住ひもの
うき世にさすらへ留者いかゞせんとてうち
なげきつゝやもとき事なるべしかゝるまゝ
そゝきこゝろくそゝとも云しさそれなくうきこと
こゝろにいさゝれくうき世をいとふ心もまし
竹林院禅定門 玄賓僧都 真福寺の僧正 云

記ノメト

留士の杜のなかにおもひたつ
留士の杜のなかにおもひたつ
もいかゞせんとて我身ひとつ
ず舟にてなさもそこ
てこそ事をとゝのへてやさもえかなくて
かなしき林こゝろ
おりの如くなる事をそんしてなりひ
といさゝかの道心

記有友

わびぬまゝかゝる人のうさかなひとそ
はきなくいかのなかにひとり
のかなしきこゝろわひてこゝろいたり

三人より便なくて
なくの人と仁者
みちうき世上
由うしろめ
人よわんの
人よわんたる
歌よんで
なりひこ
芸露なひく
心得
(教)

小北小町

宮辛市野
后宮高給
ノウタメ

芸露ヲヒキカセ

(役)
そ役とのそむ
それよ
いさむる義

(若業)
なり平ら
心ぬ
人の
たとへ
煩悩

(役)

芸露が
(若業)

三人一

平貞文

芸の
ほて
云ふ
古今妙案六

ひろく行通(ゆきかよ)ふ事也(なり)。安(やす)らかなる座(ざ)の義(ぎ)。
林の賢に流(ながれ)ます。座席(ざせき)廣(ひろ)き事(こと)。
かひもなくそこい年(とし)とへて。(ヒトノヨニヒトノヨシヒトヲ)
そのおりのひのうひ
とうとく云(いひ)つゞけ。行(ぎやう)そ(ぎやう)せんなど教(をしへ)
のうひうひしくなくそわきまへ。心世(こころよ)
とせくくもひそ(ひそ)まりよく家人(けにん)
おのんこと人(ひと)〻
いうくもれいにも事(こと)かはりて惟(ゐ)もう郎(らう)や
返(かへ)るやうにもなくすゞろ
うへき事(こと)とあ(あ)
ミツナ

蝉(せみ)のそれ(それ)とへ(へ)ども千(ち)年(とし)
生(いき)
ね(ね)の哥(うた)こゝ心(こゝろ)
書(かき)
なり朋友(ほうゆう)のうち
共(とも)
かゝれ(かゝれ)ねのやうにもおもふ
称(ほめ)名(な)
ふ計(ばかり)
ふた人(ふたり)の
の教(をしへ)

おこりおこりもとやいひそめけん世中のむさと
なりもの人のかたくなしきをそしりてもそうら
てのことをこと歌義こ下心よかれあしかれ
とわさうめ悪(ひ)とかきりて
よき事をもこひさ物
なりて人の心に違(たが)ふことをも
悪(にく)むべきにあらねどもおのれ
なりもと云ふ心をつくみあ多を
よくもる物の仁をそこなふやすく分(わ)き
人ときいはんや心おかぬさまにて
義なき下心人のこの表裏(うらおもて)を又心得のたがふも
と思ふべきいはんや
我をなりふりや我心よき人の我とそね
わるくいひ心もてひのれとをこがましの教

人云れなりと云人よハさこととも打まもり物て人
しおもふく庭(そこ)をなりんとんともるも悪(にく)きこと
を正義となりふりつくさ教
なりふりともこころのこりふれいるやふりーふうへ
義なき下心悪(にく)のかりの中あくい悪共凡人(ただびと)のこころ
こととなりつくき教
我をのこなりてやこころをつくきといてや心おかぬさまにて
義なき下心人のこの表裏(うらおもて)を又心得のたがふも
と思ふべきいはんや
我をなりふりや我心よき人の我とそね
わるくいひ心もてひのれとをこがましの教

一本フカヤフ

一本ヨこ人ー

さむさも秋をへだてなくおもほえけるを秋
もとをなくおもふ心ありて何事も
かくことをこそ事ゆゑもなき
山ごえをこそわびしと思
たにこそうき云思ふ死事を思ふ
後事ゆゑなくおもふ成ぬれ歌
わが事ゆゑなくおもふ成ぬれ歌
みくなくてなどさやうの事か
為云ふ心人いたくもふけ
物なるうちに初めつかしくもふけ
人をとて恋ふる成物の義と覚

わびぬつる月とや人のながめけん我ゆ
の月とは今ぞ思ふ
心なき秋にはあらねど月をのみ
こそ物は悲しかりけれ
左大臣
心いりてかりそめにも我ゆかぬ
雲の山路にあとをたれつつ
なかり唐土のうの山と云
唐土のうの山とは仏山を云ふ
されど書くことなんのこと
てる事ありのうの山ゆきかふにも
ひ奇ハ伊勢うの山

いふかひなみんの妻しこ福吉坂川國のれみそ
よ〜暗山いふをそくくまを不なしいふくこと下心
何事ふもおりしい立ふわらんまあまわなるこ
妻てさ事そくくこそおりみてをそのくさのいさめこ
雲晴わさ夜の山月淡まーやと云ふ人の心とんてこそやまめ
雲それいふ物ふとふこのそてなさ夜の
山のもゆうやうそ路から心とんくこそ山のもゆる事いやま
兄なうく君人の心とんくこうやまもあこ云ふこ
甘事人の心とんくこうやまもあこ云ふこ
めとこそ山ふ世事のおりしれもゆうよおな

それいこのわさきの山月淡まーやと云ふんてそ
三月山夜うえてそやまもそ下心世月月紙ふ
月の上よ来るそのそこたふこそ　イセ
雁渡かうかうの松もて〜かこと秋月とかみてた元
ひそくこふいさきわるこんいそくしもなくく月の
ありわるこ歌こ心奇ふ紀ろう紀月なかくこそ
かいふ月秋ろうさこ心ふ紀の字こ　ヨミ人一
雨なれ何そいふくく前萱のみそれそろふ月紙の
よそくふ除こ心ふ前萱のみそれそろふ月紙の
さ雨なれいわーまこと云ふうこそやうよ上
雲みられていうみこれとさもなさ人七月

まだ除(み)侍らぬ先に死にし妻の心
さこそなくさめまほしけれ心も利(さと)しと聞(きこ)えし妻(め)
かりとゞまるしもべ
かの人を
かなしその名ぞとゝまる事の悩(なや)ん侍りて
侍りてまもなくうせにし我独(わへ)
逝(まかり)し心悪(わ)をあやしみのく事をいさゝかも
イトコナリケルヲトコヨリケテ人ノイヒケレハ
ヨキカセ
ゝ云事よ多くの侍りとそ
称(たゝ)さ事をそのこゝや名ん
称(たゝ)さゝゝい称(たゝ)

みるくわこゝろ人のこゝろかなゝゝ
ゝ侍りき心を云とやゝ
ゝ記(しる)す後の歌となる
なけ来(こ)ん山ゝたく成(なり)
我心ひなけきそ山(やま)
ゝ杖(つえ)とたきゝ
ゝ事をとゞめてゝ心なる
なゝとの心山ゝゝ
もゝゝ云ゝそいへ
歌をいありのゝまにて是(これ)
歌をいなゝと云(いふ)ふ

ヨミ人ゝ

二十三

御[ま]袂の心そ無[なき]ものから
万[よろづ]その[こと]なれたる様のもの
ともうるともんとは敢[あへ]
[ず]共[とも]并[あはせ]ていうなるこんの
すへきの義[ぎ]とて人[ひと]の捨[すて]ん
ともこゝろ[は]金剛[こんがう]不[ふ]壊[え]の
白雪のとも[は]我[わが]方[かた]へ積[つも]れと心[こゝろ]消[きえ]
義なくとゝ[は]消[きえ]ようとれ[ども]
落[らく]ちんこん境[きやう]とも[は]大[だい]自[じ]なる不[ふ]動[どう]金剛不
壊[えさう]法[ほう]身[しん]

三三人不知

物[もの]忘[わすれ]ての[の]ちの男[おとこ]なれ[ども]
もと[は][ま]ことの[の]人[ひと]なれ[ば]

[こう][ぜ]ん[ぢ]ともこれ[は][ま]ことの事[こと]とて[は]
て[て]死[し]のそれ[は][ま]ことの[の][ま]ことの[の][ま]ことの[の]
かなる不[ふ][ま]ことの[の][ま]ことの[の]
死[し]実[じつ]とお[おも][ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]死[し]ぬ[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の][ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]

法自二西川一ニナ
ハシマシタリケル
日猿山ノカヒニ
サケフト云ヲ題ニテヨマセ
タマヒケル

[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]
[ま]ことの[の]

きと猶よくそへてうつし出し事むかしもいまもかはらず
ていそはる事ときこえ
こゝろある知
ヨこゝろなき人も知
世をなをしの木ぬるとき毎に立りてうつし深のわさのきぬ
うはりそめさ代わさ衣をうつそ深くうんよ
やたくへい素門の衣めつらしきをこうはりてせ
はくくろ代打うつして世と訓をうんうやはん
久云ふ洗濯の湯よは哥とをく事と心を
名一梅花見てうたれこゝろ世間の人て
の上代吾悪をしへ久へ改道の深さ理をあら
なとゝて代井母代人へて世とのれをれをい
訓へもるとをかきとすへきの心なりとそ

二十巻の事此巻八一脈をう細事し十九巻の
雑祢も収集母代うの
と為てわることる事をしは
京极黄門云与日月俱照鬼神与争興を
文選の河りくしうる天の心八明め日月深す、
鬼神も則天子の理上の賀詞ゆも名を彩
ん代れとそまゝしく名をいそんいはまこ
王者道ハ家よわりうこいうんとなれハ日祢の
代りを天の日次をうけて天子即位し給
て新年の米穀を収くをもつて供

て天神地祇をまつり
祈禱は日祈岩戸を出給ひ
ためのみ神をたのみて
ず安全の寶祚を祈
そ道と激り王道神道皆
流よりいでし天照大神
大嘗一事即事歌

大嘗一事と云は大内の
の通り西の左衛門の南
ひし書察ル
ふり大嘗と云新嘗
馬呂一切の哥曲
名を注ざるもの
おかかひし哥
一切の哥と云の時
かかひと云又云
名り大和ひと
のんと学
大直日大
の直をとうとも
わづらしき事の始

哥九人数 物名
大直日と書 荷直のみ
神祇官の
祭祀の日を
祈念の心
天照大神
天子の
事をわたるも
ことを

仕奉ハ一望ニ民天皇天平十年正月十六日
踏歌ノ事ヨリ出テ辞退ノ時大帝
ノ人障ヲ以テ歌ヒ給ヒシヨリ是モ群臣モ祖
ノ心ヲ云シヲスシキ年トイヘ新年ヲ云
ノコトニアラネトモ代ノ始メヲ祝シ
ニテヲ祝ヒ給フヘシヤ
未ノ年ヲ
正月十又日又用有シ百官拝賀ヲ
事ヲ
賀臣君ノ直ヲ
右注日本紀無之

日本紀ニ有ヨシ所ニ舞ス

大和ヲ出ル辞

ヤマトヲイテヽアヤマチシノ帝
ヨリトヨミケル歌ヨリ始ル雪ノフル
國ノ風俗ヲ処ニ
モマレハヤマヒ辞ヲ
シアルヲトスルカ辞ヲ云ヒソヘタリシテ
十一月詔視文云大嘗ト
トソヽヒヲ当日祭ノ
ヤ心有リ群臣ノ君ヲ
ヒシ給ヒシ処ヨリ文法社ノ祭ヨリモ式辞有
君臣合体ノ義ヲ

わすれ草 迎江風ともうす草こ
ふりハ曲(きく)尋の事こ風の風俗ハ民の口ずさ(くち)(たの)(こう)(ふう)(ふうぞく)(たみ)(くち)(すさ)
むこと也
わすれ草朝こ死(しな)ても称の暗(そら)で宿(やど)を忘(わす)るゝ物(もの)也(なり)
的こ月(つき)ハ和(やわ)らかく出(いで)ること極人(ごくじん)ごとの出(いで)るさ後(のち)
也のこんハ曲尋中(きくたづねのなか)の一(いち)ツ也(なり)吧(は)也(なり)君(きみ)ハ万民(ばんみん)
家(いえ)をうやまふこと父(ちち)のごとくにおもひわすれ
ぬことをこゝろたつ鳴(なく)こと鶏人(けいじん)唱(となふ)るごとく
みづくきとハ筆(ふで)ハ一国(いっこく)の風(ふう)也ハ一郷(いっきょう)の風俗(ふうぞく)
水(みず)ぐきの墨(すみ)のやうこ水(みず)蜂(はち)と称(しょう)ての約(やく)の君(きみ)のふり
ふり舞(まい)こゝろ心(こころ)ハ我(われ)さうりハもの一(ひと)さかり

事ふかくいかふる事をなげくこゝろ
ねがくハ急(きゅう)也(なり)帝(みかど)ハ文王(ぶんおう)を帝(みかど)
の事(こと)をねがひ出(いで)ての詩(うた)也(なり)
えんかる帝(みかど)のさ後(のち)のこゝろ
三月山ふり 三月(さんがつ)山一統(いっとう)近江(おうみ)ごとく草(くさ)
ふり色(いろ)も一郷(いっきょう)の風俗(ふうぞく)こ
三月山村出(いで)てくれ(なえ)ひの時(とき)ハ
三月山(さんがつやま)ハ三月(さんがつ)ハ水(みず)流(なが)こたゞ一(ひと)ツ小(ちい)さくみへてくろく
ちいさく紀(き)毎(ごと)こんハ晩(おそ)生(ばせ)の帝(みかど)ごとく心(こころ)を
称(しょう)ての詩(うた)也(なり)
ふり物(もの)の帝(みかど)

榊ハ不変

神垣の三室の山の榊葉の榊のみまへ幾よ経ぬらん

榊さへ三室の山も名のみして神のいがきもりも立たず

山も神のみむろもこれやこの杜の榊葉も色のみぞ見る

山かつの爲のみ社の神垣にかざす榊も年ぞ経にける

榊やたひとすりさ榊の立さかゆさ神のさかえも

八百よろ万代かけて榊葉の色も心も変らざるらん

まきもくの人も悩(なや)む事のあるときは榊葉をこそ手向(たむけ)すべけれ

きと生(お)ひて榊葉のさかえつゝ神(かみ)ぞ守らん

くしけずる榊の葉にも神(かみ)ぞ宿(やど)る

なり振(ふり)垣(がき)きこ

まきもくの山人と今も見るかな榊さしつゝ

かけて頼(たの)めの山の杜(もり)にあなかしの神(かみ)

事(こと)の時遠方(をちかた)のさ

きこそ不思議(ふしぎ)なれ

聞(きこ)てやうのおく行てもまだ見ぬ

事ありと神(かみ)の山うつをみてこそ

ふとうたゝめりしき流(ながれ)の

人と人もかるうし

み山(やま)なれ山もる宮(みや)のうつ

心(こゝろ)なうこゝろも

神垣の榊よ

上(かみ)中生(なまなり)

三てり月出てき哥なる
のなし〳〵天下と云海
漂奥のわたつのさゆる我ひとり
見ん独(ひとり)の水さへ
りよめる心を
かくて我てこよひ
我門の板井の清水(しみづ)里まさ
汲(くむ)とりと初(そめ)よ月と云哥
いにしめの哥　天照太神乃ん
さのこ屋ひのこ屋川よ汲とり
出哥ハ前巻りハさ

祓神とれり事
なりてあ〳〵也と
哥り　いき神よ
乃神と云りさんん
さとりさんん哥
め哥と云書とけ
わ家時泳
月神と云こひなり
と神とひこと
馬ハ神の栄物(さかもの)
さとにんとりハ

かへし物の哥　　呂律の律ようつるといふてきく
かへし物と云名目は前曲よりも侍るとやら
さ耀馬采の律の哥と源氏物語の巻
りおりかへしてなとこゝろ
巻柳とうく来かもて鶯のねてよ萱草の花
世葉の巻も詠り　うくひすのかさにぬて
小梅死大明心し撥一哥と云拍の事
かくもくれ一つのうつる事一月紅の義と叫し
雨うれしくさしれ中山おひしせる細谷川の巻もやさ
帯おせるい細水の巻一小紋治義と巻のさや
けきと民清の宮と

ん八源合まても新のそうねてこかさし世を
かもるこ万葉ようさやけさといふれるり告を
西波かもるんこもしいく大方一哥をいい
て底りおりんを源くこあてう世そうりてへ
只羽り祝言とちそうてうりされ羽父い
く加く心さうなさきうやた泣哥い義
和のはへのさんのくにの哥一義和八仁明のはも
はへと民れ加へと云義こはへみそうそもこれ
はれへ可加て
みまさうやくめのさて山さうり報名ふたてり代をよ
万代そりのんも善悪一名をたてりの心

名のなくるへきハ常ゆへ名よわりもの心を左治的
なり水の尾ハ清和のれいまし
義法の国関の義川多くもとれ者ようてん芳代迄よ
心ハおくハく陽成院のれいまし
若う代ハかさうもあしも長演の三枚の歌なくもと
んぬく光孝の山へのれいまし
おもてのやう境の山と立てうれいまし
心ハぬくおもてのやのそ文字ハやとめ字ときまれ
かたてうれいまし奇の風河ともハ今上の山へのれ
奇杜山へ一ゑあくしれ奇ようてうりて奇の組若
とうの当代と義ともちくの奇文内

あけさうた　東国のれ名をうけること
みちのく奇　一国せ国れ風俗
おくゑ小奇立てうりのれ名をなしまして午後
長ハ芸の奇くれ後ぬく
清奥ハいたくおまて遠国の浦おく母のそてうも
組てよかてものかもハもる心ハ織古
乃くハく
我せこと郭公ゑりて芸午後のれ国そ表
行とをかれ杜恋
おくろ橋みれのまゝ雨のふりにきとそ
義ありくハく平安おなり

みそなはしこゝろさこゝ世を
ほさつてこゝいはゞ良なり
究上門のうれいなくこゝいたる
出羽よりとそり心い水のごとくなる母のいきよりも
せうれくかつてをうやうなれいまことにい
なかせり心月計一月を云ふめてをさやう
よいへ奇さなくいふそやうやう月ひさしくなりまよ
なやこゝ心ととそ
私をもてあつかう心を我りしい朱の松山浪も越ん
心あついこ松山の波のまに奇ともそまる
あやこめでたくこゝ義云ひ七首い歌云ひ家り

陋竈とうつもみちのくの名水を汲
とくるを庶の奇うつてこゝ人みもこゝ世
をもるをとこゝ云ひありて実の事なりこゝいふさ
由りこゝ國の風俗の奇なるこゝ心事の事
いかゞ実のうつり天実いと高きのかさも
み日月星もまさくと眼前みてをうこゝを
実一心をもつてこゝ世をの奇ある風俗なる月
神家ある心ある月旅の奇こゝ奥の奇これい
鬼良の理神のこゝをのつり王道も天実まこ
とをありうつて一切宜まつにかりの心うさられ
もうかさき西を日月鬼神のごとくこゝて宣

家に申出し近り第一の哥は天子の御代をしめと
いひてその哥は天子の御をもてあそれる事となりしを
世集の眼目也此一首を獨朗の理と心得べく
はなにとものしり道よりかなふをもて此集の心もつぐべき
まなへきこと
としほの磯たちなし磯なつむめさしぬらしまれ沖よ
めさしは磯なつむ子ろは拙なそりし又和布かる
処のことはとも云りかし海物の人とも君のめ
くみ給ふへきのんて沖よりとれなしとはまこと
わさとやもてなせしと云也
法なき此のかのかは法はあまて君かみつけに海士と
親わかし

さればかかるものはせはいかなれと心はおなし
法なきねの家此紅葉も落流すり末もちるねかなへてかな
かなへての紅葉とをしもなみて下心君の流心まて勤挙
等なるへきの義也
甲斐かねをさやにもみてそれなくしよこほりふせるさやの中山
さよの中山のことかりみして心なくよこほりふせるとよ
くもと教へし
かひかねも猶あし山あし吹風と人よもかりやことはく
甲斐かね山とあらし上は高めして苦とさん
かんし下のもんは君命のかかるきと恵す古け
このかしこのつしをもめくみかつてとられ給と

めくらし

根ハ文末目くらし足引の山也山のひとつむかなり（そま）（ツラユキ）

義なし（在郭公空蝉間）

とうなきれ木

かけるそても何とうなまのきてよんかういかの竹く　かし物と（勝臣）

義なし（ヲカタマノ木　友則下）

くれの松を　草の名て詠し

あし付く義はそれハ文書のかもみよのこと見しくいる所（ツラユキ）

わらハなり（忍草　利貞下）

なきの井　みやこしま

ときのあらしありとも…しきハ秋…へのおもかり（小松　小町）

おもハく（カラコト　清行下）

そのことの　あやしく

うれしきをいかにそめとのこそあれ歌の宮のおそろし也よ（アヤ　モチナ）

何くハ之（此帝ハ…の御帝の御庭よりおりさせ給ふ時…桂宮下）

歌部　巻第十一　奥山の菅根しのぎふる雪の下

宮ふくへとあふる心ハ大井川かなるる水よおもしろさをもかり

心のうごき義なりや

おかしく

わさるこう（みね）坂山のさね（すすき）蔵かはとも歌ひくるらか

義なし

歌　三　巻第十二　恋しくと下みと思ひの下

日くらし

そま
杣人ハ宮木ひくらし足引の山の山ひこよひとよむなり　ツラユキ

義なし　在部公室蜉蝣間

をかたまの木

かけりても何をかたまのきても見むからハほのほとなりにしものを　勝臣

義なし　ヲカタマノ木　友則下

くれのおも　草の名ならし

あし時と恋つつをれハ夕暮のおもかけにのミ見えわたるかな　ツラユキ

わかへなり　忍草利貞下

をきのゐ　みやこしま

をきのゐて身をやくよりもかなしきハ宮こしまへのわかれなりけり　小野小町

からこと　カラコト　清行下

そめとの　あやもち　アヤ　モチ

うきめをハよそめとのミそのかれゆく雲のあハたつ山のふもとよ

ゆるへし

此哥ちかいの帝の住所よりおりさせ給ふ時詠ける　桂宮下

恋歌　是第十一　奥山の菅根しのき降る雪の下

宮こへとおもふ心ハ大井川なかるる水にまかせてもかな

心のうちこもる義ありや

おなしく

わきもこにあふ坂山のしのすすき穂にはいてすも恋わたるかな

義なし

恋三　是第十二　恋しくは下にを思ひの下

はるかなる人
あめの帝の
迫石の采女
をとめらこ

衣通姫の詠
春くれば帝姫
をとめなりけり

大上のさこの山なる名取川いさや我名もよに流れてん

あるにしもあらぬ人をや川と名取川と云事は此帝の御よ
ばひや可有

山しなの高野の滝のしたにのみ人の恋つゝ我こひめやも

此帝八十に餘り給ひて崩御なりけり

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

無口 老十口 そよてふの事の下

我世こそ人にあはれと思はるべき身の限りなるものと思へば

秋の山もとひさしくとゞまりて人をまつむしの声のかなしき

てさうるかな

九十九もゝそぢあまりの下

ツラユキ

同

道わかぬ空にもゆく雁金はいづれまことぞ文ぬしはいづれぞ

十一首 但十首也

古今和歌集真名序聞書抄　紀淑望

夫とは　發言の詞と云事を云出さんと云心也

和哥とは　和は國と此國の人と哥と云ことを云ことはさし

託其根於心地とは　根とは根源也心地とは人の心の底心

のあるへし所をいんは眼耳鼻舌身にかゝる所をいふ乃

ちこえにかくるを心地と云地よりよく花のつけへしと

根とは元来の意也心は是をさして自性自

性の源はあらわれ是を物に託る所を哥

とは云し

發其華於詞林とは　詞とはいろゝき自性の心を

もあらはさる是哥の大底を云し

人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變とは

是は世間の人此世にうまれたる所は皆何をも

ことわさなくてはかなはぬ事を云わさとは

二六時中のわさ也枕をとり身をとゝむるも皆

わさ也さればことわさと云事をわさと

されは思慮とは物の底をよくしてたのしひ

かなしひ變して人皆心を苦しめてやすみ

しらぬを安うねは又現當とをうくされ

人の事わさ悪をひかる所をさして云は式

哥といふなるとゝも云さ哥人は心

空虚ありて今に相續する所なり範を

凡て気を宝とし
これなそ〻意則妙の外純〻の心
通よ恒とれい世事れも此とのうるもとろ
かうれいく二世の安楽
感生於志求歌於言とハ　心に真の事し詠とハ
くの思事れ初よ出るをいふ
是以逸者其於樂慾者其於悲　逸と安
きのかる義の安らされいこと教へも楽を
のこゝろを心悲ふうれいこと恨る人いこと
かなしこゝろもとろて云ふいこと
此ととしもり心いれ元来これをうるもの

これてふもりりなれ心のくしかん
事とおもへくされい帝しむ人のみ
かん事をもとろ〻〻ふ人きこと天地ハ
ん心そくへいく〻ふ人きこと天地ハ
そうろ凡流たり〻〻一切の人の
為しかしこれ人ハ不の外物ろ
こ云ふとくく寿〻
可以速懐可以敷憤とハ　只世帝をみてこと
なくさめいきとろもやむへきされい帰
動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和帝一とハ
令く相續晒し

毛詩の注にあるごとく事理よろしくと
云ふ給因ふ前代水の
心則天地なれいと思
月ふんでとをしてよめるとも
とも毛詩に鬼神二
云事なれい鬼神
んでてけい歌
名なひろ人もろふ
物ひろ道もし史ゆ
くなひさきてこふ
和哥二有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六

曰頌　なるの序小云しと
若夫春鴬之時秋中秋蝉之吟樹上雅曲折谷
歌哥ハ感物詠者有之自然
今派もとくるもしか
毛詩云ふ若詩云れ
ふるふ心ハ類同志とのみを哥と月並
乃花ごとに井ふ長の鴬のまをとむた
せと秋の蝉の秋と
暁秋夏ハ蒙の荒
心も月並の花ごとれい哥人の
め為流ふ純家ハ曲折を求

くれくれとたのめて今日も暮しつ
待つには過ぎぬ帰らざりけり

題しらず　読人しらず

風吹けば沖つ白波たつた山
夜半にや君がひとりこゆらむ

題しらず　読人しらず

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らねかわく間もなし

題しらず　読人しらず

君をおきて哉人を思ふ我心
あだし心を我もたばこそ

題しらず　読人しらず

山城のうつそみ山も妹と我
越えし時より恋しきものを

題しらず　読人しらず

山城のうつそみ山の岩つつじ
我見て知らむ人もこそ来め

題しらず　読人しらず

和哥とはいくよの事ぞ
遠つ人雄神ゆ上下ふ
八雲立出雲八重垣妻籠に
八重垣作るその八重垣を

仁徳天皇

難波津に咲くやこの花冬ごもり
今を春べと咲くやこの花

王仁

安積山影さへ見ゆる山の井の
浅き心を我思はなくに

采女

君が行き長くなりぬ山たづの
迎へを行かむ待つには待たじ

磐姫皇后

わが背子が来べき宵なりささがにの
蜘蛛の振舞かねてしるしも

読人しらず

我が背子を大和へやると夜ふけて
暁露にわが立ちぬれし

大伯皇女

我が背子は物な思ひそ人目多み
汝こそ我を忘れたまふな

石川郎女

我を待つと君がぬれけむあしひきの
山のしづくにならましものを

大伯皇女

わが背子を大和へ遣ると小夜ふけて
暁露にわが立ちぬれし

大伯皇女

二人行けど行き過ぎがたき秋山を
いかにか君がひとり越ゆらむ

大津皇子

あしひきの山のしづくに妹待つと
我立ちぬれぬ山のしづくに

大津皇子

古今和歌集巻六

わづかに其名のみ聞えて、其ありさまをしらざるこそおほけれ。

家久公代世の大興長寿、龍斉、慈久混本之まぢり雑折一

此源流漸繁榮給ひし、其始天之波起柱一滴之露

よりぞ。其代の事へ、洪荒なりとも、世凡ならず。大よそ真中を撰ぶ帝と云。

長短誠以混本ゆゑ、久公人の世よりは及奇しきをとりそろへ云義とぞ。

其代よりくさ〳〵の文句よりは、其代のよりくさ〳〵の義計ぞ。

義こゝのそまに泊海のたくへて可称す前ゝ物と

無せずして、そのいかのうみそれともかゝと物と

はこゝの文の内

名にし難波津の什歌天皇

なりー奇ゝ

冨緒川之篇歌天のことハ　上

奇なり

或事閑神異或興入幽玄

神異よと歌のとくなる神異といふ奇物の事をと

真入幽玄ことは深きよりうへの奇のうへくなりそ

うへのもとくなくかのれる物の不

なやそこ林異よ彩ふよ世のくりそこれ
とえもし上世のなへ
但見上古尋多古賢之語未曾耳目之教法為教
戒之端とハ　かゝるよくそこと化上古の奇ハ緻
なる道となりてまた面白と目よろこやう
世なりくもき教戒のこととすること教戒の端
とそこへいさゝかの和国之道なれハ
世揺民の媒うたなし
古天子毎良臣義景侍臣預宴者献和哥
名臣之情由斯而賢愚之性於是相分
古の天子と云ふ要之ふけるをさとも万葉の

時ふる定家也　民之安楽也
又武天皇と云ふ　民之不便也
良臣義景と云ふ　民之歓擇古之道也
世なりうとふる
無君の号也　民之尚武民
賢なりとなし
ちこかすの道ふ
まさに二をとる
不敬臣民之歓擇古之道也
ふあるとと人の
て世ふ為ようと

…と多くの人をもめし給ひ
自大津皇子之初作詩賦詩人之最前也逸塵
移波藻之字化我日域之俗民業一改和歌漸
衰　大津の皇子と申すは天武第二の御子にて詩
の道をもよくし給ひし人なりけむかしと奇
非代のことわざを捨てそれそれの事一世の零落し
給へる振神妙之思獨歩古
今之間　先師とは柿本人麻呂をさし給へるなり古今の間に獨歩すると
とはいみじくもほめたてまつれる人なりとぞ

心にいる外のきなくいとをかしきことをも
ともとせ
有山邊赤人者並和哥仙也
おほよそは人丸赤人ばかりなるべし
此二人は位も三位にて天下の風儀となれり
哥をそへ等同
哥とそへ不絶　綿くことわりと
このみそしるとなるべし
及以時変遷滄溟貴寄
源氏実落其流業　此時は大津皇子
の御ことを此詞にて賤しそれ

みちさかひく哥よみて心さしの
深きをそうけひて孝養
双比爲花鳥之使
允食之容以此爲
活計云雖故事
爲婦人之右
難遁太史之
前。

しるしの人は是と記鳥のたぐひもと
記るの後とは記
とのこゝろく捉世のみだ
世とつゝる中〳〵ちさ
なるへし其ひとりの道と爲れる
て人丸のおもひをよせ
。
近代海内古風者絶二三人弦長能不同歟仍雜

二三人とのべて六人と出せしも是又筆のすさひ
華山儒宗得哥新法其詞華而實少
如畫盡好女徒動
人情在原中将
之哥其情有餘
其詞不足如基
雖少彩色而有
基高文琳巧
詠物然其体近
俗如賈人之惹
鮮衣宮治山
僧云攀其詞
業雖麗而首尾
停滞如望秋月
遇曉雲小野
小町之哥古衣
通姫之深也然

斃而無一亂刀如病婦之
易死者大抵暴主 逆臣 亡 死非 其
命 而古猶名大丈夫也
也 曰有命無而 勉 其 爵 如 田 文 之 皇
死前也

不可勝數其大
底皆以斃爲
基不名哥云
趣者也

○ 栄氏姓流聞者 ○ 八
俗 も 強 かる 和 を
云 こ と 云 こ と 実 か る 趣 を
し さ う や
倩人 争事 栄利 不 用 孤 和 尊 一 倩人 世の
栄 へ 利 か る 和 こ と わ こ と の て 尊 の
強 か る 和 と 見 る
照 武 云 こ と 雖 貴 無 相 將 と 八 富 住 そ う く し て
わ る い 名 よ 近 く て ま う こ と な と

寧 お と 世 と 利 罪 と 重 の事)
留 餘 令 淺 而 と 八 位 う
そ う な 人 の 上 に 心 八 そ
と も そ れ さ 物 こ 寂
況 ま こ と 貴 さ と み そ う も さ こ
ま こ と 雖 貴 無 相 將 と 八 富 住 そ う く し て
わ る い 名 よ 近 く て ま う こ と な と

皆共書古中無之
諷お世上遠方
な世被知者唯
和哥之人而已何
者

語 近 人 耳 二 と 八 漢 字 と も 和 訳 そ く
そ の こ と こ ろ を 云 て も 和 訳 の 道
義 慣 神 明 也 二 と 八 神 明 の よ う な 人 と な る

旨

平城天子沼侍臣令撰万葉集　平城天皇

なゝ〻の天つしるしも給へ〻

皇家永時歴二十一代数百年一其後和哥辛酉

敘万　万葉集ともろ〻のこのうれ事ゝ所十代百年

久可尋ともろ〻のたまはわ〻と

其最風体の称ことともろ計ともを要之ともろ

まてうとけと

風流如野相公経信卿尚侍納言而皆以他才聞不以

和道顕

風流とは昔の野相公経信卿尚侍納言而皆以他才聞不以和道顕

情こゝろうふ歌さやうしたゝ〻なりとやう

なせと見るこゝろこゝろ此詞行平〻哥の上ひか

まけをもりとありてしこときかゝる人世にれ

かゝれと其式道とハ沢あ〻て純才一心とかく

ふし實と要之場こも和國の風うたゝ〻かなしもあし唯式道ともわ〻りたきこと

陛下御宇ゝ今九載こハ　九年〻

仁流秋津洲之外恵茂統波山之陳とハ　皆山者の

仁沾とかもる義こ

渕愛高沢之新ゝ窮ゝ閑谷とハ　愛他ともる人を

恨をなくさゝこ

砂長為巌之頌洋ゝ満耳ゝとハ　毛ハ者九渥

愛詔大内記紀友則御書所別當之前甲斐少目凡河内躬恒等生存生也

思縄脱絞之風歌興久廢之通とは　万葉集

そもそもなる通とあつめ撰者くくく

小目　家集　撰者家集并古来旧号とは　いあつめもれ事ども通ふなれど

名歌家集

人とは凡人とをなり

曰

續万葉集とは　うちきくくえん集と名を并

放是童有詔

言類所奉

ふるかなくてかな紙数ふくりくえくえて

市老名曰

古人今和哥

撰

後古今集とはうりも古代く集れるも

長等詞小春死之歌名鶉秋萩之長とは　英之

う鼻下の須之なくてとをわやーの

名をうなくてとをわやーの進退之二ふうる

名をうなくてとをわやーの進退之二ふうる

況哉遥恐時俗之嘲退恥古意之拙適遇和哥之中無以樂吾道之再昌嗟乎

乙時イ

延喜五年歳次丑四月十八日臣紀貫之等謹序

此集家ノ〻不稽雖流ト
家ノ稽トモ不ト且任師流之加了見ニハ
ト云ハ基後後成ノ歌ノ見ニ任ル云云
ヨヤ河トモアルヘキヤウヤトテ
近代俳諧ノ輩ノ好士以書生之矣猶有識ノ秘事ト
可ニ濁道之魔姓ト可ニ用之ニハ　モ人ノヤウニナル
トナン
但此用捨ハ可ニ随其人ノ自他発別ニ一
和ノ道ニ以集ノ大意ナシ
志同者可ニ治之ニトハ
云ニカ

貞應二年七月廿二日笑雲　戸部尚書在判
同廿八日令讀合流之書人落字ヲ
傳嫡孫ニ可ニ為將来之證本ト

傳受之後宗祇庵主ノ一帖以後ハ常縁ニ
ヤシ加筆ヲ加詞者也門弟随ニ思ヒ在之仍為
後證又加此詞耳

文明七年五月三日　平常縁在判

寛永十五戊寅年仲秋吉辰

二條觀音町風月宗智刊行